……

荒村　食を乞い了って
帰り来る　緑岩の辺り
夕日　西峰に隠れ
淡月　前川を照らす
足を洗って　石上に上り
香を焚いて　此に禅に安んず
我も亦　僧伽子
豈　空しく　涼年を渡らんや

これは越後の良寛の詩である。托鉢の後に、焚香安禅（ふんこうあんぜん）する彼の真摯な相がよく伺える。

子供を相手に毬をつき、はじきをし、かくれんぼうをしている良寛と、僧としての自覚の下に真面目に自己を見つめて宴坐する良寛とは、決して別人ではない。「我亦僧伽子豈空渡涼年」わしも坊主だ、どうして安閑としていられるか。

この言葉こそ、他山の石として素直に受入れていきたいものである。

自坊の縁起

中井　泰淳
（兵庫県本泉寺住職）

本泉寺を読みかえて、通称「もといずみ」の名を定着させていただきたいものと思っております。

おそらくこの寺号は、法師品の「高原鑿水の譬喩」から命名されたものと存じます。

世親の『法華論』には、(イ)究尽すべからざるものは、小乗の泥濁の水から出離している。或は、(ロ)蓮華が泥水より出ずるが如く、二乗も法華経を聞いて仏となることができる。すなわち、前者は法について、後者は人についての出水の義が釈されてあります。

何しろ酒どころ神戸の灘でございます。酒の出来映えの好し悪しは、湧水の如何にかかっております。この意味にかこつけて、「もといずみ」の呼称を希望いたします。

標題からは、由緒ある寺院の縁起かと、お間違いになるむきもあるかと存じますので、前もっておことわりいたしておきます。

一つの寺が、小さいなりに形造られて行くその濫觴期にまつわって参りました私の半生をお伝えすることで、今席の持分を果させていただきます。

従って、主題であるべき教化の名に価いするものか否かは、お聞きいただく各聖のご批判におまかせいたします。

私としては、他を教化する、あるいは人を教化できる意識など毛頭ありません。むしろ自分が人と触合い、事々折節に教えられ、気付かされて来た今日までのプロセスの骨子の何点かをお伝えすることで、限られた持ち時間は尽きるものと思っております。

主題に入るために、私の風変りな学生生活について、多くの時間を費すことになることを、先ずお詫び申上げておきます。

仏教学部に入学するなり、早速に文学部に転じました。理由は、学生生活を少しでもエンジョイしたかったのと、師匠へ[註(1)]の理由なき反抗であります。

随身していたお寺[註(2)]を、誰の許しも得ぬまま抜け出し、九段にありました学生援護会の紹介で、羽田空港でのアルバイト生活をはじめました。

当時の私は、「坊さんがお経を読むことは、古来の言霊(ことだま)思想にかろうじて支えられている程度の意味しかない」などと、生意気なことを考えておりました。だから、どうしても他の分野での自分を試みてみたかったのだと思います。(言霊と申しますのは、わが国上代において、言葉に霊威があり、その力が働いてその言葉通りの事象がもたらされる、言葉のもつ不思議な力のことであります。)

昭和三十年末に石橋内閣が成立して、アルバイト先の日本空港ビルKKで、はからずも私が虚空に三回舞上る胴あげをされました。

自民党の会社でありましたから、立正大学の学長が総理になったお蔭で、何故か私が胴あげされる結果となりました。

自民党の会社という表現は、奇異に聞えるかと存じますが、事実がそうでありまして、選挙毎に中堅社員が入れ替る。落選議員の秘書が当然の顔をして入って来る。いたはずの社員が当選議員の秘書であって、会社には帰ってこない。これらの事柄をみても、この間の事情を如

実に語っております。

羽田での給料と日本育英会の奨学金とを得べく、学校と羽田とねぐらとを行き来しながら卒業しました。この時点で、羽田では大卒社員待遇となりました。立正大学では修士課程に入って、国文学研究室の副手として手当をもらい、奨学金は今までの倍額となりました。

何足ものわらじを履き、それから二カ年の間に多くの人と交りました中で、生涯関り合うことになる一人の好青年と遭遇しました。言ってみれば、私にはないもの全てを、相手はそっくり兼ね備えているタイプでした。

その青年は、空港郵便局長の紹介状を携えて、「年末の短期間、自分を含めた三十人ばかりのアルバイトを纏めて受入れてくれるところを捜している。ついては心当りに口添えを頼む」という奇抜な話をしてきました。やむなく、空港に入っているビル管理会社の事務所に取り次ぎました。渡りに舟とばかりに相手はこの話に乗って参りまして、双方願ってもない年末二十日間の好首尾となりました。受け入れ側からは、人集めの手間がはぶけた分を、私に礼金としてくれました。

私は「高山樗牛研究序説」なる論文を書きあげて、修士を卒業しました。けれども、僧階単位は履修いたしておりません。このような私に、業を煮やしていた師匠が、前もって段取りをつけていた本泉寺の後住の縁に、反抗心も失せていたので、その四月から連なることになりました。

神戸に参りましてから二期の信行道場に入るまでに、「樗牛の日蓮主義考察」なる高等甲種の論文を書いて提出し、再び口頭試問のために立正大学の学長室へ喚ばれたのが冬の寒い日だったと記憶しています。ようやく教師資格を得た時は、二十五歳にもなっていて、まことにうかつ者であります。

この寺は、昭和二十六年に寺号が公称されていたとはいうものの、借地の上の仮堂が実情で、月々地代を払うのでさえ負担に思えた状況でした。

関西の寺檀関係は、回向に出向くのが基本であります。実益をともなった義務観念で臨みました。従って読経の際の意識は、背後の家人に向けられたものでした。それでいて生産部門に携わらない自分が、お布施を頂戴する

ことに異常にこだわり続けました。多かれ少なかれ似たような思いは、まじめに物事を考える方ほど、ご経験があろうかと存じます。

自分の立場ややっていることが、どうにも納得が行かず、人様の顔色ばかりをかなりの期間伺っていたように思われます。やたらと自身と他者とのことが気になり、物事にこだわり続けました。それと気付かぬまま、六或示現につつまれていたのかも知れません。

このような時期に、見かけたことのある人物と街中ですれ違いました。お互いが振返って声をかけあうのが同時で、羽田以来の邂逅を喜び合ったのが、かつての好青年久内茂幸氏であります。相手は畳込むように、私の僧形の意味の説明を求めてきました。私は、なぜ久内氏が神戸に居るのか確めねばなりませんでした。彼は、関大法科出身で一旦は大阪府警に入り、その後出直して、家業の建築業を継承するため、建築士の資格取得を目的に東京の大学に在席していたとのことです。その当時に羽田で出合ったものであることが概ね理解でき、今の所在と私の寺とは、さほど離れぬところである奇遇をただごととは思えませんでした。

本日の参考資料の中の『いのち』誌の頁を繰りましたところ、高見随秀師の一文中に「一人恐るべし」の一句があります。その一人恐るべしが、自坊の縁起における久内氏であります。家業を継承して、ご自身が株式会社久内工務店を起したばかりの時だったようです。

私はこの再会に力を得て、神戸に来てから一、二年の間に知り得た数人に呼びかけ、ともかく真摯にものごとを考え合う会を持つことにしました。どのような会にするかを模索するため、各々が得意とするところを開陳していただくことにして、先づ神大法学部の研究室にいた今の広島法務局長に人権問題について述べていただいたり、次には私なりの漱石論を披露しました。これに対して苦言を提したのが久内氏で、「漱石を聞きに寺へ来ているのではない」というのです。そこで止むなく、不得意としながらも僧階論文で手懸けたばかりですので、基本的に『日蓮宗読本』をテキストとしました。従って、私なりに改めて勉強しなければ格好がつかなくなりました。逆に彼は、その時から、秘かに近代文学の勉強を始めた

ようです。今では私の方が、ついて行けないレベルにあります。殊に樋口一葉の日記の現代語訳と、彼女の評伝とをものにして、一歩も引けを取りません。

この会は、その後着実に継続発展して、昭和四十八年には会則を設けて神戸蓮泉会(日蓮宗本泉寺の会の意味)と称し、目的とするところは本泉寺関係者のリーダー養成であります。どこの寺院にもある護持会・婦人会・青年会・親睦会の組織を設け、それぞれ本泉寺の名を冠したこの四会を、更に包括指導する形で神戸蓮泉会は存在しております。しかし幾分違うところは、檀信徒のリーダーはその内の四割程度で、他はもっと広い意味での寺の縁起にまつわった方々でありまして、メンバーは一般市井の方もあれば、錚々たる方もあります。大阪府大と神戸大学のO教授。サンテとモルトの社長で長友研究所長。そごう専務で神戸店長。広島法務局長、税理士、高校教員、司法書士、女性弁護士といった多彩な顔ぶれで、会員数は四十名程になっております。従って、寺がかかえる問題、あるいは会員相互間の問題処理は、このメンバーの間でほぼ解決できる態勢ができております。それというのも、当初、二十代の若さで久内氏は天台宗から改宗し、以後私の外護者として一貫した姿勢を示していて下さいますので、事ある毎に類を呼んで、おのずと会自体の交際も広がり、今では前進座やすわらじ劇団などでも、神戸蓮泉会の名は通っております。このような会を地味ながら継続発展させることは、それなりの資金面、その他のてこ入れが必要ですので、昭和五十四年には会則を変更して、会員中の専門家の智慧をかりて、人格なき社団としての性格も付加しました。

話しは前後しますが、昭和四十二年七月九日、神戸の水害が端緒となり、寺の横を流れる二級河川の復旧工事に伴なう換地問題で神戸市と渡り合い、それをはずみに地主と交渉して、土地を買上げて本堂を建立しました。

聖誕七五〇から七百遠忌にかけての期間、更に引続き土地問題が起り、寺と久内氏とで分筆してこれを買上げ、寺側に庫裡を建設、小さいなりに書院をも建てました。

本堂と庫裡の二回の建設に関しては、檀信徒から寄付も仰ぎましたが、これら全て久内氏の設計施工になれるものであります。借地の上の名ばかりの寺が、土地と建

物とで二、三億のものとなりました。

分筆して彼が買上げた土地を、寺に無償提供していただき、これを神戸蓮泉会員に限り特別会費による駐車場に使用して、年間百万円を産み、蓮泉会の活動資金に組込む。人格なき社団と呼ばれる由縁であります。

嘱累品に「余深法中、示教利喜」とあります。どこまで拡大解釈いたしてよろしいものか、それはともかく、檀信徒でない会員も含め、この寺の縁起に融通無碍なる力をかしていただきました。

しかし大切なことは、信仰に目覚めたとき、当然化他に志を向けない限り、利己のみの安心はあり得ません。安楽行品には身口意の上に誓願安楽行が、勧発品に四法が説かれるのも、故あるかなであります。『諸法実相鈔』を拝読いたしましても、然りであります。

しかし、教化の言葉がさきに振りかざされるのはいかがなものでしょうか。己れの信仰の確立こそがその核であり、そこから促される言動が、教化に連なるものだと思えてなりません。創価学会員がいたずらに折伏の言をひけらかすが如くに、本宗の教師の口から、教化の言を軽々しく口走ることには、これまたこだわらずにはおけないのが、今までの私であります。

しかしながら、私の今席の話は、大きな忘れものをして時間がなくなってしまいました。

それは本仏と私共とは、すべからく一大事の因縁として示される父子の関係にあることであり、同時に今席申述べる上で、すでに寺号が公称されてあったこと。私で三世ですが、開基・二世の本の姿を置き忘れて話しを進めて参りました。このもといずみも、私が関り合うまでに歴史は浅くとも、大正十二年の妙行会館建設にはじまる中井家と外護者を挙げての寺造りに尽された苦節の流れがあります。その流れに向後立還って、残る半生を整えるべく、題目信仰の何たるかを伝えて行く義務があります。それを成し終えて、はじめて「もといずみ縁起」を後世の方から語っていただかなければなりません。そこにはじめて、教化の言が定着されるのではないかと思うのであります。

註(1)　出雲市連紹寺先住故米田静雄僧正

(2)　目黒区立源寺（住職石井隆教僧正）